

由布院盆地

由布院盆地は周囲を1000m級の山々に囲まれた自然豊かな里山の温泉地です。由布院温泉の歴史は古く、奈良時代に編集された「豊後風土記」の中にその名が記述され、「柚富郷、郡の西に在り」と紹介されています。郡は現在の速見郡です。その後、西暦8

23年、太宰府政庁は由布郷に倉院を設置しました。そこでこれを「由布の倉院」・「由布の院」と称していましたが、のちに院名が逆に地名となり「由布院」という呼び名が生まれました。「ゆふ」と記すために使った文字は、その時代時代によって、柚富・木綿・由布・油布と異なっています。昭和30年、旧由布院町と湯平村が合併して「湯布院町」と改称しましたが、

これらはいずれもその時代に最も適当と思われる同

音の文字を使用しているものであり、「ゆふ」という呼称は千何百年もの間、変わることなく続き、ここに歴史の重みを感じます。



じやいしんせ

蛇越峠

由布院温泉から県道11号線(やまなみハイウェイ)を阿蘇方面に車で20分ほど進むと、由布岳と由布院盆地を一望できる蛇越峠展望台があります。その名は大蛇伝説から付けられました。狭霧台と並ぶ朝霧の撮影スポットとして多くの人が写真撮影に訪れる場所です。

んでした。

ある日、目見麗しい婦人が突然僧を尋ねてきました。そして僧に、「どっか私をあなたの妻にしていただけないでしょうか」と熱心に頼みました。僧は驚きながらも「私は出家の身ゆえ、妻帯する気持ちはありません」と断りましたが、その婦人の意志は堅く、一向に諦めません。ついに僧は、その婦人と一緒に暮らすこととなり、夫婦となりました。

【僧の妻になった龍神】

むかし、一人の旅の僧がいました。各地を行脚した後、この地に来て、池の近くに小さな草庵を建てて住んでおりました。彼は年若く、とても美男でしたが、どこから来たのかその素性は誰も知りませ

僧は、あちこちの家々を回って喜捨を受けて、帰

りが遅くなる事も度々ありました。すると、妻は「もし、夜分遅くお帰りの際は、表の戸を開ける前に必ずお声をかけてください。」と何度も念を押して言うので、少し不審に思い、帰りが遅くなったある

日、妻の様子を見届けようと、突然戸を開けて家中に入りました。とたんに、「あっ」と驚きの声をあげて立ちすくんでしまいました。そこには大きな龍が部屋いっぱいにとぐろを巻いて寝ていたではありませんか。驚いた僧の声に目を覚ました龍は、慌てて妻の姿に戻りました。龍の姿を夫に見られてしまった事に涙をうかべて、うらめしそうに僧を見つめ「何を隠しましょう、私は山下の池に住んでいる雌龍です。あなたを一目見てから恋しく思う心を抑えきれず、人間の姿になり妻としていただき、楽しく過ごしてまいりました。でも私の本性を見られてしまったからにはここに居る事はできません。元の住みかの池へ帰り、再び人間の目につかぬよう姿を

隠します。これでお別れです。決して私の後を追わないでください。」と足早に去って行きました。僧は後を追うと言われましたが、懸命に彼女の後を追ってしまいました。それに気づいた彼女は、たちまち龍の姿に戻り、口から炎を吐きながら直ちに引き返す事を促すように僧に立ち向かいました。これに驚いた僧は立石の池のそばまで逃げのび、思わず気が抜けてそこに座り込んでしまいました。するとたちまち一つの大きな石になってしまいました。山下の池の西北、海拔1038mの野稲岳があり、その麓にある「立石」と呼ばれる大きな岩がそれだと言われています。

【龍神様への雨乞い】

むかしから、山下の池に雨乞いの祈願をすると、必ず願いが叶えられると言われ、それはここに住んでいる龍神様のお陰だと言い伝えられています。山下の池は、豊富な水量の自然湧出源があるので、どんなに日照りが続いていても絶対に水が枯れることがありません。その湖畔にある龍神社は、小さな祠ですが、僧の妻となった神秘的な伝説の主人公である雌龍の魂を鎮め、雨乞いの願いをかなえてくれることに対する感謝の気持ちで村人たちが祀ったもの

です。

